

世界の労働関係研究所・資料館・ 図書館 (14)

— イギリス・ウォーリック大学現代情報センターとリーズ訪問

五十嵐 仁

はじめに

私は2001年9月25日から30日まで、イギリスに滞在した。その間、9月27日からマンチェスターを訪れ、29日にはリーズを訪問した。リーズ訪問の経緯は、本文に書いたとおりである。

今回は、このマンチェスター訪問の後半にあたる。マンチェスターの南、コベントリー近郊にあるウォーリック大学の現代情報センターを訪問し、その後、やっとの思いでリーズにたどり着くのである。

マンチェスターでの「駅違い」

2001年9月28日、ウォーリック大学の現代情報センターModern Records Centreを訪問するために、コベントリーCoventryまで行ってきた。日帰りだったが、往復4時間の旅だ。

イギリスの列車に乗るのは初めてだったので緊張した。しかも、最初にまたヒヤリとすることがあったので、なおさら緊張しながらの旅となった。

マンチェスターで私が泊まったホテルは、駅の近くにあるかなり大きなホテルだった。近くの駅は、Victoria Stationという。移動に便利なのにと、わざわざ駅の近くを選んだわけだ。

当然、コベントリー方面行きの列車はこの駅から出るものと思っていた。しかし、それは間違った思い込みだった。

ホテルを出て、歩いて10分もかからずにVictoria駅に着いた。駅の場所を前の日に確かめ、列車の時間や乗り継ぎも、前日のうちに駅のチケット・カウンターで確認してある。

しかし、掲示のテレビを見ても、乗るべき列車が出ていない。出発するホームが分からなければ乗りようがない。念のためにチケット・カウンターに行き、「この列車のホームは何番ですか」と聞いた。すると、またもや意外な答えが返ってきた。

「ここからは出ませんよ」「エッ?」「出発するのはピカデリー駅です」「エエッ??」

地図を見たら、確かにここのほかに駅がある。街の反対側だった。ピカデリーと書いてある。昨日印刷してもらった時刻表にも、MANCHESTER PICと書いてあった。この「PIC」に今まで、気がつかなかった。

「またやってしまった。大間違いだ」と思ったが、このような失敗にはかなり慣れてきた。早めに出てきていたので、まだ時間がある。急いで外に出てタクシーに飛び乗り、Piccadilly Stationに向かった。

マンチェスターには大きな駅が二つあること、ビクトリア駅よりピカデリー駅の方がよく

使われていること、特に、私の乗るバーミンガム方面やリーズ方面の列車はこちらから出ることなどについては全く知らなかった。実は、マンチェスターについては『地球の歩き方 ヨーロッパ』に出ていず、何の予備知識もなしにやって来た。そのツケが回ってきたというわけだ。

今回の私はビクトリア駅を使わない。したがって、その近くにホテルをとっても何にもならなかった。とんだ「駅違い」だった。

ウォーリック大学現代情報センター

前日に降っていた雨も上がり、次第に雲が薄れていく。良い天気になりそうだ。

予定通りの時間にコベントリーの駅に着き、タクシーを飛ばしてウォーリック大学に向かった。この大学には、法政大学からもこれまでたくさんの方が海外研究や留学などで訪れており、以前から話を聞く機会があった。

ウォーリック大学は、イングランド中部にあるコベントリーの南ウォーリックシャーに面したところに位置している。人文科学、社会学、科学部の三つの学部があり、学生・院生合わせて1万5000人が在籍している。学科数は29で、48もの研究センターや研究機関があるという。

その大学にやって来たわけだ。落ち着いた雰囲気綺麗な大学だった。図書館の前でタクシーを降りて撮ったのが、右の写真だ。

私が訪ねた現代情報センターはこの図書館の裏にあり、廊下で繋がっている。後ろの建物の大半にも図書館の蔵書が入っているということだ。地下1階が資料書庫、1階の一部が事務室と閲覧室、残りが資料書庫で、書庫の棚の総延長は5kmになるそうだ。後で、その中を見せていただいた。

現代情報センターは1973年に図書館の一部として出発し、この建物は1993年にできたも

のだという。資金の半分は石油会社のブリテッシュ・ペトロイアル（BP）から出ているそうだ。



ウォーリック大学図書館



現代情報センター

中に入って用件を告げると、横の事務室からチャールズ・フォンゲCharls Fongeさんが出てきた。彼から説明を聞き、中を案内してもらった。

ウォーリック大学の現代情報センターも立派なウェブ・サイトを持っている⁽¹⁾。しばらくこのウェブ・サイトについての説明を聞き、その後書庫の中を案内していただいた。情報センターはこの建物の、1階と地下1階を使っている。



案内して下さったフォンゲさん



資料の棚

情報センターといっても、ここにある情報の大半は労働組合や労使関係に関するものだ。TUCの資料もかなり入っている。

TUCについては、関連する資料保存機関として、北ロンドン大学にTUC図書コレクションがあり、マンチェスターには資料館がある。これらと重複しないように気を付けているという。

それぞれの機関にどのような資料があるかはウェブ・サイトで確認することができる。したがって、TUCについての研究はこの3カ所に行く必要があるが、逆に言えば、この3カ所でほとんどのものを見ることができるということになる。

TUC以外では、合同機械工労組、運輸一般労組、紡績、鉄道、造船、教員労組や公務員労組などの資料が充実しているということだ。ただし、資料目録の電子化はまだ完了していない、一部のものについては冊子目録を見る必要がある。

資料は専用の段ボールの箱に入って積み重ねられている。この箱は特注品で、脱酸性処理が施されている。ズラリと棚に並んだ資料類は、壮観そのものだ。整理中のものはほとんどなく、大部分が閲覧可能になっている。

ただし、資料整理の方法は極めて簡単で、関連する資料を集めて高さ10センチほどの段ボールの箱に入れ、箱の外に整理番号を付け、中身のタイトルを記録して棚に並べるというやり方だ。したがって、箱を見ただけでは何が入っているか分からない。

一般の閲覧者は書庫の中には入れないが、もし入っても中身の見当はつかないだろう。書庫への出入りはどこも厳重で、ここも暗証番号で中に入る方式だった。

所蔵資料の大半は文書資料で、ビデオや写真もあるが極めて少数だということだ。所蔵されているものは基本的に資料だけで、図書はない。

運営資金が大学から出ているという点は大原社研と同様である。資料整理のプロジェクトや電子化に向けてのプロジェクトがあり、これらについては文部省傘下の委員会を通じて資金が出ているという。特別プロジェクトについて文部省からの補助金を得ているところも、大原社研と似ている。

アーキビストが5人でアシスタントが2人、そのうちフルタイムは2人と1人だというから、スタッフはそれほど多くはない。それで、あれだけの資料を利用できるようにしているわ

(1) HPのアドレスは<http://modernrecords.warwick.ac.uk>である。詳しくはそちらを参照。

けだから、大変、手際よくやっているということになるだろう。

1時間半ほど案内していただいて、帰途についた。帰りは、大学からバスに乗ったが、これが2階建てバスだった。2階建てバスはロンドンの名物だが、ロンドンでは乗る機会がなかった。ここでようやくその機会に恵まれたというわけだ。

しかも、2階の先頭に座ったから、見晴らしの良いことは言うまでもない。難を言えば、バスの背が高い分だけかなり揺れるということだ。隣にいた人に駅を教えてください、来たときと反対の経路で帰ってきた。帰るときは、もう様子も分かっているので、心配はない。

コベントリーからバーミンガムまでは各駅停車だった。のんびりとした雰囲気が漂っている。乗客の一人に、「この列車でバーミンガムまで行けますか」と聞いたら、わざわざ時刻表を出して到着予定時間を教えてくれた。誰にでも英語が通じるというのは、やはり大変便利だ。

それに、皆さん、親切だった。私が一見して外国人だと分かるからだろうか。それとも、おぼつかない英語で聞くものだから、心配してくれているのだろうか。

リーズ訪問

ウォーリック大学現代情報センターを訪問した翌日の9月29日、リーズの街にやってきた。リーズ大学のある地方都市である。

ここにやって来たのは、ダンカン・マッカーゴ Duncan McCargo さんに会うためだった。それは、アメリカにいたときに書いた私の書評⁽²⁾がきっかけだ。ハーバード大学の生協書籍部には、日本関係の本が並んでいるコーナーがあった。そこで偶然見つけたのが、マッカーゴさん

の書いた本 Duncan McCargo, "Contemporary Japan," St.Martin's Press, New York, 2000 である。

英語の勉強にもなると思い、この本を読んで感想をウェブ上にアップした。すると、しばらく後に、この本の筆者自身から直接Eメールが届いたのである。これには驚いた。

そのメールによれば、大学院で教えている日本からの留学生がたまたま私の感想を読み、それを英訳してマッカーゴさんに渡したのだという。こうして、彼とのメールのやりとりが始まった。せっかく知り合いになったので、イギリス訪問の機会に会いたいと思ってどうにかこうにかやって来た。

「どうにかこうにか」というのは、どうもリーズの駅が使えないようなのだ。明日の日曜だけでなく、今日もリーズ駅は機能していなかったからだ。

ピカデリー駅から列車に乗り込み、リーズに向かった。11時12分発で到着予定時間は12時14分だ。窓に張ってある運行表を見ると、Huddersfieldの次にLeeds、そしてYorkとなっている。

ところが、どういうわけか到着予定時間になっても列車は止まらない。すさまじい勢いで突っ走っていく。段々と不安になってきた。多少出発が遅れたとはいえ、時間がかかりすぎて

いる。予定時間を15分ほど過ぎてから、列車はスピードを落とした。「やっと、リーズだ」と、私は思った。しかし、車内放送は「ヨーク」といったように聞こえる。駅の表示を見ると、間違いなくYorkと書いてある。

いつ乗り越してしまったのだろうか。とにかく、降りなければならない。直ぐに、駅員らしい人に聞いた。すると、「あの階段を渡って向

(2) この書評に手を入れたものは、『大原社会問題研究所雑誌』No.513、2001年8月号に掲載されている。

こうに行き、もう一度聞きなさい」と言う。言われたとおり、階段を渡って下にいた駅員に聞いた。

「リーズに行きたいんですけど、列車が通り過ぎてしまいました。どうやったら戻れますか」「列車では行けません。バスに乗りなさい」

「エッ？バスはどこですか？」「駅の前から出ますから、そこに行ってください」

駅前に行くと、黄色いベストを着た人が何人か出ている。

「リーズ行きのバスはどこですか？」「ここです」

「いくら？」「列車のチケット持っているでしょ？」

この時、ようやく私にも事態が飲み込めた。バスを待っていたのは私だけでなく、一緒に列車に乗っていた何人かの乗客も、並び始めたからだ。

リーズをバスしたのは私の間違いではなく、列車自体だったのだ。そして、リーズで降りるはずの乗客への代替バス・サービスが、あらかじめ用意されていたというわけだ。

こうして私は、行くはずのなかったヨークに行き、乗るはずのなかったバスに乗ってリーズまでやって来た。列車の旅が途中からバスの旅に変わってしまったというのは、アメリカでの「ニューイングランド一人旅⁽³⁾」の時と同じだ。

まあ、今回のリーズ行きは急ぐ旅ではない。ダンカンさんと会うのは6時半だから、時間はたっぷりある。余計に列車に乗れ、おまけにヨークーリーズ間のバスの旅をサービスしてもらったわけだ。こういう時は、「得をした」と考えるようにしている。

リーズの駅に着いたら大混雑だった。駅前にバスがたくさん並んでいる。私と同じようにリーズに着く人、逆にリーズから出かける人、

それぞれが列車に変わるバスで輸送されているようだった。

とにかく、こうして何とかリーズに到着し、ダンカンさんが予約してくれた小さなB&Bにやってきた。部屋は6室しかない。3階建て位の、いかにもイギリスの地方にありそうな典型的な小さなホテルだ。その一番上の屋根裏部屋が私の部屋だった。



宿泊したホテルとその周辺

こういうホテルに泊まるからにはイギリス式の朝食をゆっくりと楽しみたいところだが、どうもそうはいかないようだ。今日のリーズ駅の混乱ぶりを見ると、明日の出発もかなり大変だろう。

朝の8時33分発のバスが順調に運行し、予定時間通りにマンチェスターに着かないと、その後の予定が全部狂ってしまう。明日はリーズ駅でバスに乗り込み、マンチェスターから列車でチェスターまで行く。そこで乗り換えてホリーヘッドに行き、チケットを買って出国手続きをし、船に乗る。海峡を渡って再び列車に乗

(3) これについて、詳しくは<http://sp.mt.tama.hosei.ac.jp/users/igajin/tayori12k.htm>参照。

り、アイルランドのダブリンに行くという計画だ。果たしてうまくいくだろうか。

これは、今回の旅で一番難しいルートであるような気がする。無事、ダブリンにたどり着ければよいのだが……。

マッカーゴさんと会う

夕方、ホテルまで迎えに来たダンカンさんと一緒に出かけた。彼の家は、この直ぐ近くだそう。駅から10分、大学から7分だと言っていたから、大変良い環境にあるわけだ。ロンドンで、同じような居住条件で住むためには、今の2～3倍は給料が必要だという。

彼にリーズの街の中心部を案内していただいた。下の写真は旧市庁舎で今は地方裁判所の法廷があり、ホールは様々なイベントに使われているそうだ。



旧市庁舎

現在の市議会が開かれたり市の行政府があるのは、こちらの方だそう。前の広場は昨年再開発されて整備されたミレニアム・プラザだという。

この後、ダンカンさんに英国の代表的な食事であるフィッシュ・アンド・チップスをおごっていただいた。何だかご馳走になるために押し

掛けてきたようで申し訳ない気がした。

ただ、一緒に飲んだのがビールではなく紅茶だったのが、いかにも英国式だったが……。食事と一緒に紅茶やコーヒーなど温かい飲み物をとるのは、この辺りの労働者の習慣なのだそう。



現在の市庁舎

とはいえ、彼と交わしたこの時の会話は大変興味深く有意義なものだった。それには、私にとって彼の英語がとてもし聞きやすく分かりやすく感じたということもあったらう。

彼は日本で英語の教師をしていたという経歴を持っているから、発音が分かりやすかったのはそのせいかもしれない。それに、話の内容が大体見当のつくものだったということもあるだろう。

それはともかく、イギリスの現状に対する彼の見解は大変シビアなものだった。この前会ったTUCのスタッフの方より、数段、批判的であるという印象だった。

確かに、今のイギリスではある種の「バブル」が生じており、株も不動産も値上がりしている。失業率も低下している。表面的には好調のように見えるが、実際には多くの問題を抱えている。

かつての中産階級は消滅し、国民は二つに分裂しつつある。標準的な生活水準を下回ってい

る低賃金労働者は、かえって増えているかもしれない。仕事に就いているとはいっても、低賃金で不安定な仕事が多い。



ダンカン・マッカーゴさん

社会保障の水準は、以前の保守党政権の時代からそれほど大きく変化していない。ブレア首相は、それ以前の保守党政権の政策の多くを継承しており、基本的・根本的な変化は起きていない。

ブレアの政策は、「人間の顔をした保守主義」だ。この言い方は、私の独創ではなく、よく言われている。新労働党は労働党とは言えない。しかし、ブレアはこの前の選挙で勝利を収め、人気もあるから誰も正面切って反対できない。

この前の労働党大会で直前に出席を取りやめて帰ったのは、テロ対策を口実にして逃げたというのが本当だ。もし大会に出席していたら代議員から総攻撃を受けていただろう。

マッカーゴさんの話は、大要、以上のようなものだった。大変辛口のブレア政権批判だということがお分かりいただけるだろう。その後のイラク戦争へのブレア首相の対応を見れば、この批判は的を射ており、かなり先駆的なものだったということができる。

ただ失業率については、TUCのコタラワラさんも、その見かけの数字と真の失業者の数と

の食い違いについて指摘していた。イギリスの失業者は、数字で示されている以上に多いというわけだ。

それに加えてマッカーゴさんは、失業者でない有職者の問題をも指摘した。職を持つ人であっても、低賃金で不安定な就業を余儀なくされているというわけだ。新自由主義の下にあるアメリカや日本と同じような状況だということになる。

したがって、「第3の道」とはいつても、保守主義の変種に過ぎない。それ以外のもう一つの選択が必要だが、それはまだ形になっていないというのが、彼の意見だった。

「第3の道」すらその影も見えず、「人間の顔をした保守主義」ならぬ「改革者の顔をした保守主義者」の政権へのポピュリズム的支持の大波が押し寄せている日本の現実からすれば、それでもまだましなのではないかというのが、私の感想である。このような、現状に満足しない批判精神の中から、さらにもっと進んだ新しい社会の構想が生まれてくるのかもしれない。

* * *

さて、この後も、私の旅はまだ続きますが、この連載は今回でうち切らせていただくことになりました。というのは、これまでの連載を元にし、今後の分も含めて執筆したうえで、法律文化社から『この目で見えてきた世界のレイバー・アーカイヴス (仮題)』として出版することになったからです。私がサボらなければ、8月くらいには店頭には並ぶことになるでしょう。

これまで、この連載を愛読していただいた読者の方には申し訳ありませんが、上記のような事情ですので、この続きは著書を購入してお読みいただければ幸いです。これまでのご愛読に感謝いたします。 (完)

(いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所教授)